

夫の歿するに及び、利長は往年秀正の荒山に於ける戦功を思ふて、その遺知九千石を襲がしめた。秀正後利長に高岡に従ひ、又利常の大坂冬陣に隨ひ、夏陣には金澤城代となつた。元和四年七月十一日歿。

コヅカヒテヨ 小塚秀世 通稱左膳。寶曆十一年父雲平の遺知二百石を襲ぎ、後役銀奉行に任じたが、明和四年役筋不埒の廉によつて一門御預となり、七年五月十六日知行を召放された。時に四十一歳。

コヅカマル 小塚丸 ↓トウエモンマル 藤右衛門丸。

コテラ 小寺 能美郡苗代郷に屬する部落。小松町法界寺の由緒に、同寺はもと古寺村にあつて鎮華院小松寺といふたともある。しかれば小寺は古寺の義かと思はれる。小松寺の省略と見る説は取らない。

コテラコレタカ 小寺惟孝 通稱甚三郎。武兵衛。享保十八年父市郎右衛門登路の遺知五百石を襲ぎ、御馬廻に列し、改作奉行・御勝手方・御作事奉行に歴任、寛政元年百石を増し、次いで御馬廻頭に任じ、文化元年歿した。

コテラジンエモン 小寺甚右衛門 父を新兵衛といひ、豊臣秀吉の臣であつた。甚右衛門は越中守山にて前田利長に召出され、祿五百石を受け、元和元年大坂の役に五月七日岡山にて戦死。子孫世々藩に仕へる。

コテラヒサタカ 小寺久孝 通稱平左衛門。父は甚右衛門宗休。祿五百石。會所奉行を經、御算用場奉行に至つたが、元祿九年饑饉の際その處置當を得ざるを以て役職を指除かれ、十五年歿した。

コテラユキミチ 小寺遊路 通稱武兵衛。市郎右衛門。字は興義。號は希光齋。世祿五百石。會所奉行・御横目・御歩頭に歴任し、享保十八年七月廿七日四十五歳を以て歿。遊路學を室鳩巢に受け、最も六經に達し、遂に室門七才の一に數へられたが、詩文は得意とする所でなかつた。

コテン 古田 加賀藩で改作法を施行した以前から存してゐた田地をいふので、それ以後の新聞に對する名稱である。

コト 琴 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

コドウ 巨道 ↓セキキヨコドウ 石居巨道。

ゴトウエツジヨウ 後藤悅乘 下後藤程乘の次子。通稱理兵衛、諱は光邦。白銀師で、上後藤の演乘と隔年交代して金澤に下つた。

ゴトウエンジヨウ 後藤演乘 上後藤覺乘の子。通稱勘兵衛、諱は光英。前田綱紀の時下後藤の悦乘と隔年交代して下り、白銀師の事に興つたが、後には専ら京都に居て綱紀の書齋蒐集の任に當つた。

ゴトウカクジヨウ 後藤覺乘 通稱は勘兵衛、諱は光信。覺乘の父長乘は琢乘の従兄弟で、白銀師を職とし、世に上後藤と稱せられた。覺乘寛永中前田利常に召出され、下後藤の顯乘と隔年交代して金澤に下り製作に従つた。

ゴトウカズチカ 後藤和陸 通稱彦三郎。穴生方で、城中の石垣築造を司つた人。文政八年金城深秘録を著した。

ゴトウカンベエ 後藤勘兵衛 山口宗永の臣。大聖寺城が前田利長の爲に攻撃せられた時、勘兵衛は宗永の使者として、丹羽長重の

後援を得る爲に小松に赴くの任に當つた。
ゴトウキヨサダ 後藤清定 通稱清左衛門。七兵衛詮清の二男。白銀師を業とし、別家を立て、才次郎忠清の跡式を復興した。明和五年十二月廿四日歿して子がなかつた。

ゴトウキヨシゲ 後藤清重 後藤市右衛門の子。右兵衛清永は、越後に生まれて白銀師を業とし、寛永五年に歿した。右兵衛はまた兵庫頭に作り、清永は清定にも作る。清永の子市右衛門清重、前田利長の越中高岡に退隠した時召されて扶持を給はり、後金澤に移つて寛文四年二月歿した。清重の子孫は世に加賀後藤と稱せられる。

ゴトウキヨスガ 後藤清冷 通稱才次郎。七兵衛久清の子。白銀師を業とし、安永八年十月二十日歿。

ゴトウキヨノブ 後藤清寅 通稱七兵衛。清次郎廣清の子。白銀師を業とし、元祿元年十一月廿七日歿。

ゴトウケキユウキ 御當家舊記 一冊。前田家の種々の典故を説話體に記したもので、國事昌披問答から材料を取り、聊か餘事を加へたものらしい。

ゴトウケンジヨウ 後藤顯乘 京都の白銀師後藤琢乘の家は、その子徳乘の時から、長乘の家に對して下後藤と言はれた。徳乘の子理兵衛顯乘諱正繼に至り、寛永中前田利常に百五十石を祿せられ、上後藤と隔年金澤に下つた。

ゴトウサダツグ 後藤定次 通稱才次郎。世に九谷焼の創始者とするものであるが、工人ではなく、その監督者であつたらう。元來才次郎は金工で、大聖寺藩分立の際加賀藩か

ら從屬せしめられたものであり、その江沼郡九谷に陶窯を起したことは、同地に金山があつて、才次郎が山師の監督をしてゐたことが前提となるのである。才次郎は寛永十九年の大聖寺藩分限帳に百五十石と見えて、今年五十石加増とあるから、それまでは知行百石であつたのである。次いで正保三年・承應元年の分限帳にも載せられ、萬治三年藩主前田利治卒去の後中澤久兵衛が殉死せんとした時、才次郎は一番に既付けたが面接を得なかつたことが記され、その後の一切は香として知られぬ。才次郎の諱が定次であつたことは、同地願成寺及び本善寺の鐘銘に記され、寛文五

乙巳季春加賀後藤定次作と鐫した鐵鐔(川口陟著鐔大觀所載)のあるのも同人と見られる。この才次郎定次が、才次郎吉定の子であつたことは、本家吉定の末裔たる七兵衛の家記によつて確實である。但し大聖寺町實性院の過去帳に才次郎を天和三年三月四日歿と記するものは信ずることを得ぬ。元來この寺の過去帳には、天和三年三月五日田村權十良父義山院忍翁宗利なるものが記されて居たので、それを九谷初期の陶工田村權左右衛門であると推定した上で、才次郎の法名を之と類似の泰岳院安翁淳清とし、忌辰も亦一日違ひと定めたらしく思はれるからである。

ゴトウジエモン 後藤次右衛門 慶長十年の前田利長が富山養老老附士帳に、組外衆百石後藤治(次)右衛門とあるもので、十九年侯の歿去後金澤に歸つた。元和五年淺野屋次郎兵衛に銀座を、後藤才次郎に吹屋を命ぜられたが、翌六年金屋彦次郎を更に銀座とし、後藤次右衛門は彦次郎所屬の吹屋となつた。その